

ディ・ア・ リトル・ ピアニスト

北村 智恵

Chie Kitamura



1948年大阪府高槻市生まれ。ピアノ指導者。ピアノ指導者講座講師。「子どもの眼の高さで歌おう」「風の声を聴く子どもたち」ピアノ曲集「こどもの城」「ピアノの旅」「ピアノパートナー①②③」など著書多数。音楽雑誌や教育新聞への執筆も多く、ホームレッスンのかわら、朝日カルチャーやヤマハPTC、カワイ音研会など全国各地でのピアノ指導者講座の講師を務める。

大藪友華ちゃんへ

ピアノ

4年 大やぶともか

きょう、ピアノのれんしゅうを10かいやりました。

できたておだんごのきよくを10かいひきました。

おわってから、わたしは、ああ

おいしかったといいました。

トモツピー、大好きな友ちゃんー

。あなたのこの詩が、新聞の「小さな目」という欄にのっているのを見つけたとき、先生は、どんなにうれしかったことでしょう。そして、あなたの学校の「障害」児担当の先生が、その記事をコピーして送ってくれたときも、先生はどんなにうれしかったのか。同じ仕事ではないけれど、友ちゃんを通じて、世の中のどこかで誰かにつながっているという気持ち、人間の一番大切なことをその人たちと確かめあい、よろこびあえるという幸福も、あなたが先生に贈ってくれた大

きなプレゼントでした。

世の中に、ピアノを習っている子どもたちはたくさんいます。だけど、友ちゃんのように「練習」の仕方そのものを楽しんでいる人は、いったい、何人いるのでしょうか。「じょうずになる」ために仕方なく練習する、「音大に入る」ために一生懸命練習する、そんな人たちは「練習」を楽しむことなど知らないと思います。本に書かれたことを鍵盤上に移し、音を正しく並べる作業しか知らない人はけっこう多いのです。それなのにあなたはあなたの教則本にのっていた「できたておだんご」という曲を、その日、10回も弾き、しかも、曲に入りこんで音楽の中で遊び、弾き終わったとき、「ああおいしかった」という言葉が自然に出てくるなんて、本当に、どんなに、音楽している人でしょう。ダウン症と呼ばれる「障害」を持つあなたにとって、その10回すら、どんなにたいへんなことか、先生には想像が付きません。きっと、その曲がかたちになるまでもずい

分とたいへんな時間が費やされたはずですよ。それなのに、あせらず、怒らず、コツコツと何回も弾き、その曲の世界にひたりきって「ああおいしかった」という言葉が口をついて出るなんて最高だと思うのです。

友ちゃん、トモツピー、あなたの底抜けの明るさと、やさしさ、何事にも夢中になってその世界にひたりきれ純粋な魂、それらすべてが、この教室のみんなにいい影響を及ぼしていることを、先生は本当にありがたいと思っています。

今年の春、「リトルピアニストのつどい」で、あなたは、清瀬保二作曲の「小犬とあそぶ」を弾きました。鍵盤とたわむれているようなあなたの弾き方は、本当に楽しそうで、思わずみんながほえんでしまうような素敵な演奏でした。弾き終わって、客席を見てにっこりと笑うあなたの笑顔は、幸福な人にしかできない、とびきり上等の笑顔だったことを今もはつきり憶えています。